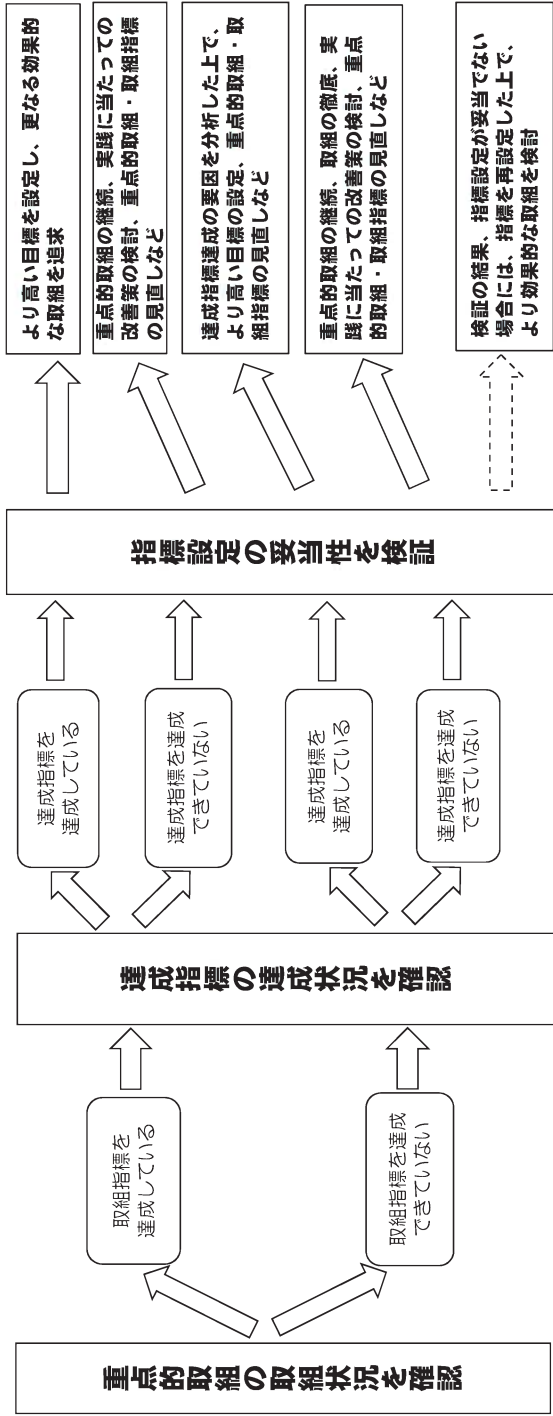


検証・改善プロセスのイメージ



検証・改善の考え方

観点 4

検証に当たっては、

- ①取組指標に基づく取組状況をまず確認し、その上で、②その取組により重点目標達成に近付いたかを検証し、年度の中でも、取組指標、重点的取組、達成指標を改善していくこと

実際の検証・改善例

重点目標	達成指標	重点的取組	取組指標	担当	実施率	取組状況の確認	達成状況の確認	検証	改善策の策定
基礎・基本の定着	○授業の内容がよくわかるかと肯定的に回答する児童の割合を100%にする。 ○単元まとめテスト60点未満の児童割合を半減する。	○あめとまどめが明確にわかる1時間完結型授業の徹底。	○全教職員が学期に3回以上「めあて」と「まどめ」を明示した互斥授業を行う。	「学力向上」チーム	70%	<ul style="list-style-type: none"> 実施日時を個人ごとに設定させていた。 「計画⇒実施」の進行管理が十分ではなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○授業の内容がよくわかると肯定的に回答する児童 → 1学期末調査：80% ○単元まとめテスト60点未満の児童割合 → 4月10% → 7月8% ○低学年：4月20% → 7月18% ○中学年：4月30% → 7月27% 	<ul style="list-style-type: none"> 【指標の妥当性】 <ul style="list-style-type: none"> 達成指標は昨年度の当該学年の状況とを比べ、達成可能なとあり、妥当と判断。 取組指標については、100%実施できていない取組があるが、推進体制を自覚することで実施可能であると判断。 【取組状況から】 <ul style="list-style-type: none"> 互斥授業について、「学力向上チーム」が進行管理をきちんと行う必要がある。 「家庭」による取組は、「チャェックシート」による点検から全家庭で取り組みやすい内容への変更を検討。 学力向上会議の状況を踏まえ、地域と学校との取組を進めつつある。 計画のうち、100%実施できていない取組があるので、主教職員で一丸となって取り組み体制整備が必要。 【達成状況から】 <ul style="list-style-type: none"> 補充学習の取組は定着してきた。補充学習をより効果的なものとするためには、得意との運動が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 【重点的取組・取組指標の改善】 <ul style="list-style-type: none"> 互斥授業の取組は継続。実施率を100%にするため、「学力向上チーム」が中心となり、互斥授業計画に基づき実施する。授業後には管理職の指導と意見交換会を必ず行う。 「朝の補充学習」と得意との運動を図るため、1週間の課題計画を作成し、それに基づき補充学習の内容を設定する。 「家庭」の取組は、取り組みやすい「家庭学習の声かけ」に変更し、全家庭での実施を目指す。 「学習サポーター」の取組は、サポーターとなる人材を増やすため、教職員が地区行事への参加を促し、自治会との連携強化を図る。
		○家庭学習の徹底。	○週2回（各10分）のドリルタイムを行う。	「目標協働達成」チーム	100%	<ul style="list-style-type: none"> ○月ごとの教育計画に位置付けて実施した。計画通り100%実施できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者アンケートより6割の実施率。 	<ul style="list-style-type: none"> ○1学期の「学びの教室」実施回数7回。 ○学習サポーターは1回平均3、6人。 	<ul style="list-style-type: none"> 低学力層は微減しているものの、重点目標達成に近づいているとは言えない。
		○家庭学習の徹底。	○毎日、家庭学習（宿題）チャェックシートに記入し、実施状況を点検する。	家	60%				
		○学習サポーターの取組の充実。	○年間20回、「学びの教室」学習サポーターとして毎回3人以上参加する。	地	100%				